

岡部警備 有限公司

直居 翔

プロローグ

うだつの上がないこの会社、岡部警備有限会社。

岡部さんは関西弁丸出しの一応社長。

その社長と、この僕、荒木大輔の二人だけのちっちゃな会社だ。

社長は、朝から競馬新聞片手に馬の研究に余念がない。当然のことながら、書類整理や依頼者へのレポートなどは僕の仕事になっている。

警備状況のレポートを書いていると、社長の演説が始まった。

「現在、過去、未来って言うやろ、実は全部同じ時間軸に乗っかってるんや。そやから、卑弥呼も家康も龍馬も今存在してんねんで。」クソが付くほど不味いインスタントコーヒーをかき混ぜながら、訳の分からないことを言っている。

「じゃあ、ヒーロー大集合ですね」礼儀として話を合わせる。

「何を訳の分からんこと言ってんねん、大集合な訳がないやろ、時代が違うんやから。ええか、時間ちゅうのはな人間か勝手に作った概念や、人間以外には時間って言うのはないんや。犬も猫も猿も日が昇ったら朝で、日が沈んだら夜や、それだけや。過去も未来も存在せえへん、お腹すいたなあって思ってる今がすべてや。」まくし立てた後一息ついて、不味いコーヒーをチビチビと飲みだした。

訳が判らないを通り越して、意味不明だ、このまま心療内科に連れて行こう、無期限に収監してくれるだろう。

「そらそうとおまえ、レポート書いてるふりして何見とんねん。サッカー見とらんと、早よ仕上げてまえ。」社長はまるで手元が見えているように僕を睨んだ。社長には肩から上しか見えてないはずだ。

「え、サッカーなんて見てませんよ、あー今回のレポートややこしいなあ。」その時の僕と言えはしっかりスマホでサッカー中継を見ていたのだが。

「社長、それはそうと、こないだ警察につきだした女性ですが、なぜ彼女がバックに入れたの分ったんですか？」

「それは見とったからや。」

「でも社長、入れるところは見てなかったでしょ？」

たしかに社長はじっとその女性を見ていたのだが、犯行自体は見ていないはずだ。

「ん？見とったよ、犯人が。」

また、訳の分からないことを言い出した。犯人は犯行を行っている本人だから、犯行自体を見ているのは当たり前だが、社長には見えていないはずだ。

「でも社長は見えてなかったでしょ？」食い下がる。

「うるさい奴やな、そやから言うてるやんか、その女がバックに入れるところを見てたって。」

「だから、犯人が犯行を見てるのは当たり前ですけど、社長は犯人を見ていただけじゃないですか。」いちいち訳が分からない。

生活協同組合窃盗犯捕物帖

今もめている事件の顛末はこうだ。

地元のスーパーで、最近盗難の被害が増えており、手を焼いていると言うのだ。そこで家の会社に私服警備の依頼が入った。なんでも、知り合いのスーパーで同様の事件を解決した話を聞いたらしい。

そこで、早速、問題のスーパーに出向いた。

スーパーは最寄りの駅から徒歩で十分ほど離れた住宅街に位置する。駅からは、なだらかな坂が続いており、スーパーに着く頃にはじんわりと汗をかいていた。ちょうど梅雨が明けきらぬ七月のことだ。店に入ると、ほどよくクーラーが効いており生き返る。

店内は一階が食料品、二階が日用雑貨や乾物などを陳列している、大型店と言うより、地域密着のこじんまりとした店だ。

まずバックヤードの店長のところに話を聞きに行く、社長はもうちょっと涼んでからでええやると、呑気なことを言っているが、約束の時間が迫っており、無理矢理引っ張って連れて行く。

事務所に入り早速名刺交換をする。

名刺には生活協同組合 店長 木村省吾とある。少し頭の涼しくなった五十代半ばと言ったところか。

まず被害状況を聞く。普段から細かな盗難は度々起こっていたのだが、半年ほど前から急に被害金額が増えていると言う。

おおよその犯人の目星は付いているのだが、その犯人の特徴は、四十代から五十代前半の女性。ちょうど被害額が増え出した頃に姿を見せるようになった。

近隣に住んでいるようではない。

犯行が巧みで現場を押さえるのが難しい。と言うことだった。

窃盗事件は現行犯で取り押さえるのが原則で、声を掛けた後に物証が出ないと人権問題やなんかでややこしいことになる。

店内を歩きながら売り場をチェックすると、1階の主要通路には防犯カメラがこれ見よがしに取り付けられ、四隅には防犯ミラーが取り付けられている。

もっとも1階は人の出入りも激しく、混み合っているので人の目も防犯の一助となっている。

一方2階は防犯カメラの台数も少なく、防犯ミラーで帳尻を合わせているという感じだ。

人の姿もまばらで、店員の数も少ない。

犯行に及ぶなら、間違いなく2階と言うことになるだろう。

「店長、2階を見てきたんですが、1階に比べるとカメラの数が少ないですね。」

すると薄くなった髪の毛を労るように撫で付けながら

「予算が出ないんです、先日も本部に掛け合ったのですが、けんもほろろ、取り付く島もない状態で。現状で対処するしかないんです。」今にも泣き出しそうな、か細い声で呟いた。

その時社長からインカムで通話が入った。

「おい大輔、怪しいのが早速現れた、2階に来い。」

客を装い2階に向かうと、隅で社長が手招きしている。

「2列向こうのお菓子売り場にガキが二人、あいつらやりよるで。」

早速その棚に向かうと、ちょうどお菓子を手に取ったところだ。

スーパーでは手に持った所で罪にはならない、ましてや袋に入れてもその時点では無効だ。

罪になるのは、レジを通さず、店外に出た瞬間からなのである。

今回は店長から聞いたターゲットとは違う小学生なので、出口付近で待機することにした。

当然社長はお菓子の行方を監視している。

「大輔、お菓子腹に隠して降りてったぞ。」

嫌な展開だ、今までも数回やらかしているのだろう。

そこに階段から二人組が現れ、そのままレジの横を通り抜けた、すかさず歩み寄る。

ドアを出たらアウトだ。

「僕たち、どこの小学校？」怪訝な顔をしながらにらみ返してくる。

「ひょっとして何か忘れてないかな？」無言でさらに睨んでくる、後ろで隠れていたもう一人の小学生が、

「あ！2階に荷物忘れてきた」慌ててきびすを返す、するともう一人も慌てて追いかけていった。

まず、一件落着、二度とやらないことを願いながら社長の下へ向かう。

「しゃあないガキやな、全然違う棚に戻して降りていったわ、ほんま駄目なでけてないなあ。」といいながら、元の場所にお菓子を戻していた。

一日目は、小学生の窃盗未遂事件で幕を下ろした。

店長曰く、近くの小学生が頻繁に現れると言うことだ、被害額も少ないため、ある程度は見逃しているらしい。

そこは、きっちりと対処すべきだとは思いますが、近隣との付き合いなど難しい問題が絡んでくるので苦慮しているとの事だった。

問題の犯人とおぼしき女性が現れたのは、警備を初めて三日目のことだ。

店長からインカムで社長の下へ一報があった。

「現れました、慎重をお願いします。」

社長と僕は打ち合わせ通りの配置につく、僕がそれとなく女性の監視をするのだ、社長は現場となるであろう2階に待機する。

まず女性は、備え付けの買い物かごを持ち、1階の食料品売り場に入っていった。

普通の買い物客である。

プチトマトやキュウリをかごに入れ、納豆などを物色しながら一回り、そしてそのまま2階へ。

「社長、2階へ向かいました。」

「来たか、まかすとけ。」威勢のいい返事が返ってきた。

社長は、四十前半、中肉中背に髪をオールバックに撫で付け、口ひげを蓄えている。

どこから見ても胡散臭い。

それに今回は大工さんが履くような作業ズボンに黒のポロシャツ、スニーカー姿だ、ポロシャツをズボンに突っ込み、良く奥さんに注意されてる。

まあ、缶詰を物色するには違和感はない。

例の女性は、缶詰とは反対の日用品売り場に向かった、社長はすかさず同じ列に向かう。

その時、違和感のある動きがあった、かごを持つ左手の肘に掛けていたマイバックを開いたのだ。

間違いなく怪しい動きである。

しかし社長が目に入ったのか、そのまま隣の列に移動する。

棚はちょうど肩ほどの高さで、違う列の人を棚越しに見ることが出来る。

僕が社長と合流したのはちょうどその時だった。

「社長、隣の列に移動します。」インカム越しに伝えると、意外な返事が返った来た。

「動くな、そのまま居れ、警戒心が強いから近づいたら実行せえへん。現場が押さえられんのは、異常な警戒心を持ってからや。」

「でも、犯行を見ないと押さえられないじゃないですか。」食い下がる。

「ええから黙ってじっとしとけ。」社長はまさに犯行を行おうとしている女性の後頭部を見つめている。

その時、小声で「よしゃ、入れた、お前は外で待機、彼女が出たら身柄を確保せえ。」

「何で分るんですか、入ってなかったらややこしいことに成りますよ。」

「ええから、確保や、間違いなく入ってる。後はレジでカゴの商品だけ清算するはずやから、それだけ確認出来たら確保や。」

と言うわけで、その後一悶着の後、なんとか女性を確保し、店長の下へ連れて行った。

最初は否認していた彼女も、バッグから商品が出てきたことで観念し、余罪も話した。

一連の犯行は悪質だと言うことで、店長判断により、警察へ引き渡されることと成ったのである。

ともちゃんの危機

そんなある日、珍しく社長からランチの誘いがあった。

普段僕達は、自宅兼事務所の自宅で奥さんの手料理を頂くのだが、今日は奥様不在のため外食なのだ。

「今日はお好み焼き食べに行こか、久しぶりにソース食いたなつた。」

そのお好み焼き屋は、会社の目と鼻の先、「お好み焼き 一平」大将を挟んで鉄板カウンターだけのお店だ。社長は絶対にテーブル席には座らない、喫茶店でテーブルに対面で座って怒られたことがある、何故か分からないのだが、社長曰く「気持ち悪いねん。」と言うことらしい。

その「一平」で僕のかわりモダンと社長のオムそばを注文した時、ちょっとした出来事が起こった。

大将の眼鏡が無くなったのだ、「あれ、おかしいなあ今眼鏡掛けとったのに、どこに置いたんやろ。」大将苦笑いだ。

「眼鏡無かったらお好み焼かれへんわ、どないしょ。」

社長はしれっと、「一平さん、さっき裏の棚に置いたで」

大将が棚をのぞき込むとそこにしっかりと眼鏡が置いてあった。

「そうやそうや、さっき細かい字が読まれへんから、ここに置いたんや。そやけど社長、なんでわかったん？この棚見えへんのに。」

社長も苦笑いしながら「まあええやん、眼鏡も見つかったんやし、はよ焼いて。」と素っ気ない。

お好み焼きも食べ終わり、事務所に帰ると、社長の幼なじみ山村さんが事務所の前で待っていた。

「どないしたともちゃん、珍しいやん。」

「実は岡部に折り入って頼みたいことがあるねん。お前にしかできへん特技有るやろ、それでちょいとたすけて貰いたいねん。」神妙な、どことなく申し訳のない顔で拝んでいる。

「ともちゃん、また何か引っかけたんか？」名前が智也なので社長は山村さんの事をともちゃんと呼ぶ。

「またって言うなよ、反省してるんやから。」どうも山村さんは引っかけやすい質のようだ。

「実はな、前に言ってた奴あるやろ。」山村さんは話し出した。

要約すると、こんな感じだ。

三ノ宮のビルで違法な賭博カジノが有るらしいのだが、そこで鴨にされたと言うのだ。

最初の数回は気前よく勝たしてくれて、後はケツの毛までむしり取られると言う常套にはまったらしい。

「そやから言うてるやんか、博打はしたらあかんって、嫌やで、俺、博打せえへんの知ってるやろ。」

「知ってるけど、もったいないやん、そんな特技持ってるのに。」

「そやからせえへんの、面白無いもん。」

先ほどから出てくる社長の特技って何なんだろう、もの凄く気になるが、このまま二人のやり取りを聞くことにする。

「そやけど、お前絶対負けへんやろ、そやから頼むわ、取り返して欲しいんや、ほんまに頼む。」

山村さんは、今にも土下座しそうな勢いだ。

「いやや、なんでお前のケツふかなあかんねん。」とりつく島もない。

助け船の気持ちで、聞いてみる。

「山村さん、ちなみにお幾ら万円ほどやられたんですか？」

言いにくそうにボソッと「七百やられてもてん」

社長が目をむく、「大輔、なんで聞くんや、アホはほっといたらええねん。」思わず後ずさり、ソファーに尻餅をついてしまった。

「山村さん、立ち話もなんなんで座って下さい、コーヒー入れてきます、インスタントですが。」

クソ不味いと言いそうになって慌てて口をつぐむ。

「大輔、ほんまにええかげんにせえよ、こいつ座ったら、首を縦に振るまで帰らんぞ。」結構本気で怒っている、本当に怒ったらもの凄く怖いのだ。そそくさと立ち上がり、キッチンへ向かう。

「おい、ともちゃんよ、聞いてもたから聞くけど、七百ってどこから出てきたんや、そんな金持ってなかったやろ。」当然の疑問だ、普通七百万円なんて用意出来るわけがない。

「それやねん、最初は気前よく五万円とか多い時は二十万円勝ててたんや、それが段々勝たれへん様になってきてな、どんどん注ぎ込んで、しまいには持ち金が無くなったんや。それで帰ると思て出口に向かったら、黒服が寄ってきてな、愛想のええ顔で、こう言う訳や。」

「山村さん、今日は付いてなかったですね、もし良かったらお金融通しましょか、ここからツキ戻ってくるかも分りませんよ。」

「そんなもん、最初は断ったよ、負けたらお金返されへんもん。そやけど、無理に断りづらい雰囲気をついつい一万円だけ借りたんや。」

そこで社長は山村さんを睨みながら「その一万円でまた勝ったんやろ。」

山村さんは呆氣にとられた顔で、「なんで分るねん、その通りや、その一万円でその日は三十万円プラスで帰ったんや。」

「で、負ける度に黒服のお世話になったっていうわけか。」

「そやねん、気がついたら借金の額が七百万円に成ってたんや。」

社長は呆れた顔で山村さんを睨んでいる、山村さんはうつむき、自分の指先を見つめている。

「なあ、ともちゃん、その借金は違法な博打の借金やから、返さんでええんやで、そのまま警察行ってこい。」

山村さんは、今にも泣き出しそうな顔で「無茶言うなよ、俺もお縄になるし、最初に免許証の写し取られるんや、そんな事したらポーアイ沖で魚の餌や、頼む助けてくれ、幼稚園からの仲やんか。」

「何調子のええ事言うとなんや、お前なんか、餌になったらええねん、食べる魚が可哀相なくらいや、どアホ。」山村さんはとうとう本当に涙を流し始めた。

社長の正体

「ともちゃん、分ってると思うけど、勝てるゲーム限られてるんやで。」山村さんの顔に喜色が戻った。

「岡部、やってくれるんか？ほんま助かる、持つべき者は竹馬の友やなぁ」先ほどの涙はどこへ行ったやら、もう取り返した気ている。

「岡部、分ってる、ちゃんと勝てるやつがあるから。」行われているゲームを話し出した。

カジノでは様々なゲームを客に合わせて行っているらしい。

一番スタンダードはやはり「ルーレット」だろう。回転する台に球を投げ込み、止まった数字を当てるゲーム。0、00から始まり36まで数字が有る、赤と黒に分かれており、二分の一の確率で勝負が出来る、もっとも緑と言うディーラー勝ちのマスも有るのだが、他にも多くの賭け方が用意されており、初心者でも比較的遊びやすいゲームだ。

日本人に親しみやすいゲームも有る、アジア地域で比較的メジャーなゲーム「大小、別名タイサイ」と呼ばれるサイコロを使ったゲームだ、カップに入れたサイコロ三つの出目を予想するという昔ながらのゲームである、もっとも日本で行われていた丁半賭博はサイコロ二つなのだが。

一番お金が動くと言われているゲームが「バカラ」、よくニュースに登場する遊びだ。

バカラは、プレイヤーとバンカーとの対決がベースで、配られるカードの合計が9に近い方が勝ちと成る、さらに特徴的なのは、他のプレイヤーがどちらが勝つかを予想し賭けられると言うルールがあることだ。プレイヤーの中では、もっともエキサイティングなゲームとされている。

次は、おなじみ「ブラックジャック」だ、主催者側のディーラーとプレイヤーの対決で、配られたカードの合計が21に近い方が勝ちと成る。日本では最もポピュラーなカードゲームだ。

最後は「ポーカー」このゲームは基本的にはプレイヤー同士の対決だ、プレイ方法も様々で、今でも新しいプレイ方法が編み出されている。

コーヒーを手に取り、山村さんが息をつく「どないや、これだけ有るんや、勝てるやろ。それにしてもクソ不味いコーヒーやなぁ。」先ほどの態度とは打って変わってぞんざいな態度だ。あんたに言われたくない。

「すみません、インスタントなものですから。」一応わびを入れる。

社長は腕を組み、「ともちゃん、しばらく考えさせてくれ、まだやると決めてないからな。」と突き放すように言った。

「岡部、頼むわ、お前しか頼る者おらへんねん、後生や」拝みながら頭を下げる。

「まぁ、考えてみるわ、二、三日したら顔出せや。」山村さんは、拝み拝み事務所を出た。

「社長、ずっと気になってたんですが、その特技ってなんなんですか？」恐る恐る聞いてみる。しばらく考え込んだ社長が、いすにふんぞり返ったまま手招きをした。

「大輔、ちょっとこい。」

「お前もここに来てもうすぐ一年になるから教えたるわ、実はな、人が見てる情景が見えるんや。おまえが

べっぴんさんの谷間を穴が開くほど見てたり、風に煽られた女子高生のパンツみたり。」にやにやしながら睨んでいる。

「いや、見てませんから。」と言いながら、冷や汗が出ていないことを願う。

「それってどういう事ですか？人の見てる情景が見えるって。」

「そやからな、自分が見てる人が見ている情景が見えるんや。」やっぱり訳が分からない。

「大輔、このトランプ持って後ろ向いてみ」引き出しからトランプを出しながら渡してきた、言われた通りにトランプを持って後ろを向く。

「何でもええから一枚抜いて見てみ。」抜いたカードはスペードの3、何となく中途半端だけどそのまま眺める。もちろん社長には見えないように。

「スペードの3やろ。」あまりにも呆気なく言い当てる。

一度では信用出来ず、もう一度カードを引く。ハートの2、引きの弱さに嫌になる、こういう時はスペードのジャック位を出したいのだが。

「ハートの2やろ、それにしても地味なカードばかりやな。」すいません、自覚してます。

「地味なカードの方が信憑性があるかなって思っただけ。」しなくても良い言い訳でもしないと、気が済まない。

「でも何なんですこれ。」

「言うてるやんか、相手のみている物が見えるって。」当たり前のように当たり前じゃないことを平然とやってのける。

「それって超能力ですか？」

困った顔で頭をかきながら「超能力かなんか知らんけど、ガキの時分から見えるんや。慣れるまでしんどかったけど、慣れてまえば重宝するで。もっとも自分しか出来へんって分ったの、大学入ってからやけどな。」

「テストのカンニングも、やり放題じゃないですか。ずるいですよその能力。」

「いや、あかん、もちろん人の答案用紙見放題やけどな、見る相手によって全然違うやろ、そやから自分で解ける問題も自信がなくなって散々や。」あごひげをいじりながら、難しい顔をしている。

「すぐにテレビ局に連絡しましょ、テレビ出たら引く手あまた、大金持ちになれますよ。」

「あほいえ、見せ者ちゃうわい。」とふてくされた。

そうなのだ、山村さんの言っていた特技とは、人の目を通して見る事が出来る、岡部社長の特殊な能力の事だったのだ。それが、本当ならば博打をもってこいの能力で、負けるわけがない。相手の手の内がすべて見えるのだから。

スーパーでの事件解決も納得である、犯人の後ろ姿を見ることで、肘に掛けたマイバックに商品を入れる場面が見えたのだ。

その夜、山村さんの依頼について話し合った。

「どない思う、大輔。」腕組みしながら悩んでいるようだ。

「そうですね、山村さんも可哀相な気はしますが、リスク大きすぎませんか？」

「そやなあ、なんぼなんでも一晩で七百は無理やろし、通うことにもなるからなあ。」眉間にしわを寄せ難しい顔だ。

「断ったら、山村さんどうなるんでしょう。」

「一家離散、ヤクザやら借金取りから逃げ回る事になるやろな。救いは嫁がおらんって言うことか。」

「奥さんが居ないって、離婚されたんですか？」

「ちゃうちゃう、元から一人や、あいつは日本一の甲斐性無しなんや。」ひどい言い様だ、ますます山村さんが可哀相になってきた。

「でも社長、カジノに行くとして、どのゲームで勝負するんですか？」

「さっきも説明したけど、俺が出来るのは、相手の手の内を見る事がやから、自ずと決まってくるわな。」

「ルーレット、大小は相手関係ないから無しやな、バカラも相手の手を見てから一枚の選択が出来るけども、運次第や。プレイヤーやバンカーに乗るのもカードが配られる前やしな。」

「じゃあ、ブラックジャックとポーカーですね。」残った二つを言った。

「いや、ポーカーはプレイヤー同士の対決やからパスや。現場に行ってみて、ディーラーと駆け引き出来るシステムやと有りやけどな。」

「そしたら、ブラックジャックしか残らないですね。」社長はまた難しい顔になった。

決行当日、山村さんと事務所で落ち合い、社長と二人で出掛けることになった。

僕はと言えば、今後のことを考えて、事務所で待機を命じられた、実は行ってみたかったのだが。

まず、紹介がないと入れないというので、山村さんがカジノの黒服、店長に電話をする、社長を連れて行く了解を取るためだ。

「山村さん、珍しいですね、最近来てくれないので心配していたんですよ。」やけに陽気な声で店長が電話に出た。心配してるのは生きていくかどうかの様な気がするが。

山村さんが応答する。「店長、今日は営業日だったと思うけど、やってる？」

そう、違法カジノは毎日営業しているわけではない、警察の目を盗むため、顧客にだけ営業日を知らせているのだ。

「今日やりますよ、二十二時からの営業ですが。」

よかった、予定の日に決行出来る。

「実は一人ギャンブル好きな友達を連れて行きたいんやけど、ええかな？」伺いを立てる。

少し警戒した様子で店長が「かまいませんけど、身元の判る物コピーさせていただきますよ。」

「それは大丈夫や、ちゃんと伝えてる、ギャンブル好きの大金持ちやねん。」いつの間に社長は大金持ちに成ったのだろう、それなら給料をもう少し上げてもらいたいのだが。

店長は更に陽気な声で「じゃあ待ってます、気をつけてお越し下さい。」と言って電話を切った。

二十二時までしばらく時間が有るので、このまま作戦会議だ。

山村さんによると、カジノは三ノ宮の東門街と北野坂の間にある八階建ビルの最上階で、ビルの入り口に監視カメラがあり、エレベーター内にも備え付けてあるらしい。もちろん看板などはなく、知っている者にしか分からないようになっている。

ゲームは先日説明のあった、ルーレット、大小、バカラ、ブラックジャック、ポーカーと言うことだ。ターゲットをブラックジャックに定め作戦を練る。

「恐らく初日はアホでも勝たせてくれるはずや。」と社長

山村さんも「そやな、俺もしばらくは勝ち続けたからな。」と自分の立場が分かってるのかどうなのか。

「逆に言うと、初日はむちゃ勝ち無理やっちゅう事やな。」と髭をなでる。

「いや、勝ち続けたらええんやから、初日で大丈夫やろ。」と山村さんは本当に立場が分かってない様子だ。

「ええか、ともちゃん、最初はレートが低いやろ、そこでどんだけ勝っても高が知れてる。俺がはまっと見せかけてレートを上げた時が勝負や、今日は様子見でええやろ。」

がっくりと肩を落とし、恨めしそうな目をしながら山村さんは「そんな悠長な事言わんと、パッパッと片付けてくれよ、日に日に借金が膨らんでるんやから。」

「そんなもん知るか、ほなら自分でやったらええやろ。」と睨み付けた。

「ごめんごめん、そない言うなよ、岡部のやり方でええから取り返してくれ、な、頼むわ。」山村さんは、謝りながら平身低頭した。

カジノ大作戦

時間も迫り、二人はカジノへと向かった。

件のビルへ着き、エレベーターを降りると監視カメラと目があった、入り口はごくごく普通のマンションのドア、まさかカジノが営まれているとは思えない。インターフォンを押すと強烈なライトが浴びせられる。「山村さん、いらっしゃいませ、すぐにドアを開けますね。」と陽気な店長の声だ。程なくライトが消えドアが開いた。

「お待ちしていました、山村さん、こちらがご紹介頂いた方ですね、まずこちらの同意書にサインと、身分の分かる物をお預かりさせて頂いてよろしいですか？」と、岡部に向かって満面の笑みだ。

「岡部正さん、職業は不動産会社の代表取締役と。」警備会社では警戒されると思い、急遽、不動産屋さんに職業変更する、そちらのほうが金回りも良さそうだ。

「こちらの運転免許証をお返しします、コピーだけ取らせて頂きました。」思っきり愛想が良い。

「では、現金は各テーブルのディーラーにチップとの交換をご依頼ください、それと、ここの食べ物、飲み物は全部無料ですのでお気軽にお申し付け下さい、では幸運をお祈りします、ごゆっくりどうぞ。」黒服は立ち去っていった。

しばらく場の空気に押されていた格好だが、ようやく一息つき周りの様子が見えてきた。

思っていたより店内は明るく、利用客も多い。ビルのワンフロアぶち抜きだけ有り、相当な広さだ、ワゴンを押すバニーガールも数人確認出来た。

天井を見上げると、各プレイテーブルごとにカメラが設置されており、その他にも至る所にカメラがある。カジノとしては当然の設備だろう。

まずは店内をゆっくりと見て回る、ルーレットは三台置かれており、客が周りを囲んでいる、女性客もちらほら見かける。

大小には年配のサラリーマン風の二人連れが陣取っている。

バカラの台は四台置かれており、人気の高さが伺える、それぞれの台では歓声や怒声が飛び交っている。

ポーカーは三台、しかし今は二台しか客が付いていない。

目的のブラックジャックも三台、一人ずつ各ディーラーと勝負している格好だ。

初日にいきなりサシの台に入るのも憚れるので、黒服を呼び、ともちゃんとポーカーを始めることにした。

やって来たのは女性ディーラー、名札には「橘あかね」と書いている。

あかねは丁寧にお辞儀し挨拶をしてきた「いらっしゃいませ、山村さんお久しぶりです、そちらの方はお連れ様ですか？」ともちゃんは、鼻の下を伸ばし、いやらしい目で谷間をチラチラ見て見ぬふりだ。助けてやるのが嫌になる。

「今日初めて連れてきてもらったんだ。」岡部はいつもの関西弁を押し殺し、慣れない言葉で挨拶をした。

「しっかりと勝って帰ってくださいね。」笑顔がさまになっている。

「早速ですが、ゲーム方式はいかがいたしましょうか？」

「そやな、今日は初めてやから、一番スタンダードな anything でええやろ。」岡部はたまらず関西弁で答える。やはり緊張しているのだろうか。

「かしこまりました、ではチップ交換を。」

現金をチップに交換しないとゲームが出来ない。まずは一万円をテーブルに置く。

このポーカーのテーブルでは、赤が五百円、緑が千円の二種類有るらしい、手始めに赤のチップ二十枚と交換してもらった。

「おい、岡部、そのエニシングって言うのはなんや、教えてくれ。」小声で聞いてくる。

ともちゃんはポーカー未経験らしい。

ディーラーの橘さんに断りを入れ、説明してやる。

「一番単純なルールのポーカーや、五枚をそれぞれに裏向けで配り、一度ずつ要らない札を交換して勝負や、その時の役で強い方が勝ち。まさか役まで知らんと言わんといてくれよ。」

ともちゃんは頭をかきながら「知らん。」ボソリと呟いた。

「橘さんええかな、悪いねんけど、教えたって。」

橘さんは嫌な顔もせず、丁寧に教えてくれた。

「まずは、五枚の手札の中で、何も成立していない事をノーペアと言います、次が同じ数字のカードが一組成立でワンペア、二組あるのがツーペアです、同じカードが三枚有ればスリーカード、次は手持ちの五枚のカードが連続して続いていればストレートとなります、但し、K Q A 2 3 というようにKからA以降につながるストレートは認められません。それから五枚全てが同じマークの場合はフラッシュと言います、ワンペアとスリーカードの組み合わせが出来ればフルハウス、同じ数字のカードが四枚有ればフォーカード、ストレートとフラッシュの組み合わせでストレートフラッシュ。お判り頂けましたでしょうか？しつこくなりますが、同じ役同士の場合はカードの強さで優劣を判断します、カードの順序は (強) A・K・Q・J・T・9・8・7・6・5・4・3・2 (弱) となります。」

難しそうやな、ちょっと見といてええかな、ともちゃんは観戦するようだ。

「岡部さん、お一人のようですから、私がプレイヤーとディーラーを兼ねる形になりますがよろしいでしょうか？」

「それでええよ、もし誰か来てくれたら入ってもろたらええ。」

「では、早速ですが、カードの確認をお願いします。」慣れた手つきで、カードをテーブルに広げる。5組のカードを広げ終わった後で、「この中から一組のカードを使います、お選び下さい。」と言いながら手を広げた。

すかさず、ともちゃんが指を指す。

どのカードを使っても変わりはないのだ。まさかいきなりイカサマカードは無いだろう。

「かしこまりました、ではカードを配らせて頂きます。」

まず、それぞれに裏向きで五枚のカードが配られた。お互いに自分のカードを確認する。

一時間ほど遊びテーブルを離れた

まだブラックジャックに空きが出ないようなので、ソファー席に収まり、バーボンのロックを注文する。ともちゃんはお酒が飲めないのでクリームソーダを注文した。不惑も超えて注文する飲み物では無いと思うが、好みだから仕方がない。

アイスより先にソーダに手を出し、お約束通り床にシミを作っている、ホトホト呆れる奴だ。

そんなこともお構いなしに。

「岡部、あかねちゃん別嬪さんやろ、あの笑顔に、ついついベット（掛け金）が大きくなってしまふんや。」とはしゃいでいる。

「おまえポーカー知らんのちゃうんか。」「ポーカーは知らんよ、ディーラーは掛け持ちやから、ブラックジャックにあかねちゃんが入ってるときに行くんや。」

橘さんは、ともちゃんの天敵らしい、本人には自覚がないようだが、相当持っていかれたはずだ。

チビチビとバーボンを飲んでいると、ブラックジャックの台に空きが出た、ともちゃんに目配せし、目的の台へと向かう。

「いらっしゃいませ、山村さん、岡部さん、お話は何っています、本日このテーブルを担当させていただきます夏見と言います、よろしくお願ひします。」

一言の無駄もなく、場を取り仕切る。なかなか侮れない相手のようだ。

「ではチップ交換を。」

このテーブルも赤が五百円、緑が千円の二種類だ、思ったより高額チップが出てこない、これで七百は気が遠くなる。

初日は数ゲームこなし、早々にカジノを出た。

事務所に帰ると、大輔がソファで眠りこけていた。

「大輔、まだ居ったんか、帰ってたら良かったのに。」目をこすりながら、大輔が起き出してきた。「結果が気になって帰れないですよ、どうでした？七百取り戻せました？」せっかちに聞いてくる。「あかんあかん、初日やからか、レートが低うて、全然あかん。」

「ひょっとして負けちゃったんですか？」目を丸くして乗り出してきた。

「負けるわけないやろ、相手の手が見えてるんやから。今日は三万の勝ちや。」

ほっとした様子で「ミイラ取りがミイラになったんじゃないかと気が気で無かったですよ。」

「作戦練らんと七百は遠いな、そやけどお前、あんなレートで、どうやったら七百負けんねん？」

山村さんは待ってましたとばかりに胸を張る。

「実はな、一階下の七階にVIPルームが有るねん、そこは高いでえー。」負けておいて胸を張るところじゃない。

「高いってどんだけ高いねん。」

「今日のチップは赤と緑やったやろ、下は黒、紫、オレンジ、茶色、それに見たこと無いけど、一回り大きいチップが有るらしい。」なぜか小声になっている。「黒が五千元、紫が一万円、オレンジが十万円、茶色が五十万円、その次は知らん。」

社長の目が輝いた「おお、それや、そこに入るんはどうするねん。」山村さんに目をやる。

「最初にVIPルームに案内されたんは、たしか、負けが込んで、二十万円ほど借金が出来た頃やったとおもう。ソファでふて腐れてたら、黒服がやって来てな、こう言うんや。『山村さん、だいぶ店への付けが貯まってきてますよ、山村さんさえ良ければ一気に取り返す方法があるんですが。』ってな。」思い出すような表情で天井を見上げながら説明した。

「そうか、借金を一気に増やす作戦に出たわけやな、んーそれじゃ時間かかりすぎるし、効率悪いな、なん

か他に方法無いかなぁ。」社長は、腕組みをして考え込んだ。

「社長、思いっきり勝って見たらどうですか？相手が洒落にならんと思うくらい。」無茶な提案を試みる。

「それしか無いか。」以外とあっさり肯定した、良い方法だったのだろうか、自分でも自信がない。

「勝ちまくって、高レートで相手を取り戻しに来るのを待つしかないか。」社長は難しい顔で髭を引っ張った。翌週にもう一度行くことを取り決め、その日は解散することとなった。ちなみに山村さんの結果は、散々だったらしい、なんとなく、やっぱりという感じだ。

V I P への道

決戦の日がやって来た、今日は八階のレートの低いカジノで、最初から勝ちまくり、V I P ルームにご招待頂こう、と言う作戦だ。

社長の特殊能力を持ってすれば、恐らく問題なく遂行出来るだろう。

社長の特殊能力とは、相手の目を通して見ている物が見える、と言う説明しづらい能力なのだ。

カジノのオープンが二十二時と言うことで、食事もかねて夕方に山村さんがやって来た。

二人がかりで行えば、取り返すのも早いだろうと、社長から山村さんに作戦の伝達が行われる。

「ともちゃん、今日の作戦やねんけどな、基本的には真っ当な勝負になる。」山村さんは頷く。

「ともちゃんも、分かっているとと思うけど、ディーラーが伏せたカードを見るのは限られてる。ディーラーのカードの内、表に向いているカードがA若しくは10カードの時だけや。」

僕は思わず声を出す。

「じゃあ社長、あまり勝てないんじゃないですか？」

社長は腕を組みながら、「そやな、連戦連勝と言うわけにはいかんやろな、ただしディーラーがカードを見る少ないチャンスを最大限に生かせば、負けは少ななる。」髭をなでながら山村さんを見つめている。「ええか、ともちゃん、ディーラーがブラックジャックの時、髭を触るから、その時はインシュランスで逃げるんやで。もっとも10カードからのAは問答無用で負けやけどな。」

訳が分からなくなってきた、時間もまだ余裕があるので恐る恐る聞いてみる。

「社長、そのインシュなんとかって言うのは。」社長は僕を見ながら「お前は行かへんねんから、知らんでもええやろ。」と、突き放された。山村さんは不安そうに僕を見ている。

「社長、山村さんが不安そうですけど。」

「お前まさか、ルールも知らんと、あの娘に貢いでたんか。」社長は山村さんに視線を投げかけ、ため息をついた。

山村さんは、顔を引きつらせながら、「でも、勝てる時は勝てたから。」と消え入りそうな声で呟いた。

「ほんまに面倒くさい奴やな、しゃあない、作戦も兼ねて復習や。」

社長のブラックジャック講習が始まった。

基本ルールはこうだ、Aは1若しくは11、2から9のカードはその数字のまま。(10 = Tと表記する)、T、J、Q、Kの四枚はすべて10と数える、10カードと呼ばれる。

ディーラーとの勝負で21に近い方が勝ちとなり、プレイヤーが勝った場合は、掛け金の倍が支払われる。チップ一枚のベットが二枚になり戻ってくるので、一枚のプラスとなる。

まず最初に、ディーラーも含めたテーブルのプレイヤーに二枚ずつカードが配られる。その際ディーラーのカードの一枚が表向け配られる。

その表向きのカードが、10 カード若しくはAの場合に、伏せられたカードをディーラーが確認し、表向きが10 カードで伏せられたカードがAの場合、ブラックジャック成立でゲーム終了となる。

表向きがAの場合は、伏せられたカードが10 カードでブラックジャック成立の場合でも、プレイヤーにチャンスが与えられる。これがインシュランスと言う物らしい。

ちなみに、ブラックジャックとは、Aと10 カードの組合せの事を言う。

「インシュランス言うのはな、いわゆる保険や、掛けた額の半分を保険として出すことで、そのゲームが無かったことになる、もっともブラックジャック成立じゃなかったら、持って行かれるんやけどな。」

「次ぎにゲームの進め方や。」社長は引き続き、説明を始めた。

自分の手元に配られた二枚のカードと、ディーラーの表向きの一枚を比べながらゲームを進めて行く。

「自分の手元の二枚でブラックジャック成立していたら、その場で勝ち、通常の1.5 倍の配当をもらう。」

ブラックジャックが成立していなければ、21 に近くなるよう、カードの追加を請求する。これをヒットと呼ぶ。その際21 を超えてしまうと、バーストと言い無条件で負けとなる。

21 に近づけ、それ以上カードがいない時は、スタンドと言い、カードを止める。

カードが手元に配られた二枚の状態ですべて勝てないと思った時はサレンダーといい、負けを宣言することが出来る、この時は掛け金の半分が戻ってくる。

手元の二枚がペアの場合はスプリットといい、それぞれ別の手として分割出来る。Aや10 カードが二枚来た場合に有効だ。

最後にダブルダウンがある、これは、あと一枚しか引かない代わりに、掛け金を倍に増額出来る。ディーラーがバーストしやすい時や、自分の手が、10 や11 の場合に有効になってくる。

「プレイヤーが一通り終了したら、ディーラーが動き出すんや。伏せてあるカードを表向けて、合計が17 以上に成るまでカードを引く。ディーラーがバーストすれば、残ったプレイヤーの勝ちになる。プレイヤーの手札が13 や14 でも勝ちや。ディーラーがバーストしなかった場合は、21 に近い方が勝ちになる。」社長がコーヒーに手を伸ばす。

「だいたいこんな感じや、ディーラーが毎回手札を見てくれたら、大分勝率が上がるんやけどなあ。」

山村さんが首をひねりながら、「あかねちゃんは、毎回見てた様な気がするけどな、勘違いかなあ。」と言った。「いや、それは好都合や、ほんまやったらラッキーやな、あかねちゃんがB Jテーブルに居る事を期待しよ。」

そろそろ時間となり、二人はカジノへと向かった。三ノ宮まで歩きながら「ともちゃん、B Jの基本やけどな、17 までヒット、それからは引いたらあかねで。」山村さんは不思議そうな顔で「なんでや、17 からでも4 引いたら21 で勝ちやんか。」岡部は呆れるように「ええか、ともちゃん1 から4 のカードと、それ以外のカード、どっちが出る確率高いと思とうねん、17 やったら勝てる目残ってるけど、バーストしたらそこで

終わりやぞ。」岡部は納得した様子で「それもそうやな、今まで18からもヒットしてたわ。」と笑った。「お前、今日そんな事したら、口から手突っ込んで、奥歯ガタガタ言わずぞ、ごら。」岡部の本気モードに火が付いた。

「なあ、ともちゃん、今日は、こないだとなんか雰囲気が違う様な気がせえへんか？」

カジノに入り、見渡した岡部が呟いた。

「そうかな、分からんけど前より客は多いみたいやなあ。」

テーブルを見渡しながらか、ともちゃんが答える。

「まっ気のせいかな、お前の彼女どこに居るかはよ探せ。」

引き続きテーブルを見回していたともちゃんが、にんまりと笑う

「おったで、予定通りブラックジャックに居るわ、早速行くか。」

テーブルに向かおうとする。

「ちょっと待て、今あのテーブル四人座ってるから、一人二人抜けるまで様子見よ。」

岡部はソファー席に向かった。

山村さんは早く勝負を付けたくてソワソワしている。自分で勝負するわけでもないのに。

「時間はたっぷりある、朝の5時までやってるんやろ、このカジノ。」

「そやけど、始めたら時間なんかあつという間に無くなるで。」

「そないに焦らんでもええよ、成るようにしか成らんから。」

運ばれたバーボンロックを口に運んだ。

その時、入り口のドアが開き、取り巻きを大勢連れた厳つい男が現れた。いかにもヤクザの親分という感じだ。

黒服の店長がヘコヘコと後ろに付いている、恐らくこのカジノの実質経営者なのであろう。

後ろのソファー席に収まり、葉巻に火を付けた。さっき雰囲気が違うと感じた違和感は護衛の人数の多さだったのだ、入り口はもちろん、窓際にも数人の護衛らしき人間が立っている。

後ろのソファーから話し声が聞こえてきた。

「おい、中島、最近上がって無いみたいやけど、どないなつとんねん。」

中島と呼ばれた黒服店長はすくみ上がっているようだ。

「数人は貸し付けで確保してるんですが、最近大きく勝負する客が少なくなりまして。」

ビクリとして「おれ、確保されてるんか。」ともちゃんが顔を青くしながら囁いた。

「どうもそうらしいな、お前、確保されてるんや、名誉なこっちゃな。」

「洒落ならんわ、早いこと取り戻して、解放してくれ頼む。」

アイスクリームで口の周りをメイクして頭を下げる。

「そない言われても、勝負は時の運やからなあ。」

男の話は続いている。

「言い訳はええ、どんどんハメて、ぶんどれ。」こっちはお構いなしに、大声で怒鳴りつける。

「分かりました、鴨見つけてしっかりやります。」中島は深々と頭を下げた。

「いっちょ鴨になりに行くか。」そう言って岡部は席を立ち、橘あかねの立つブラックジャックテーブルへ向かった。

テーブルは客が入れ替わり、端端に一名ずつ座っていたので、二人並んで間に座った。

進行中のゲームの邪魔にならぬよう終わるのを待ち、現金をチップに交換する。

前回と同様、赤が五百円、緑が千円の二種類のチップだが、今日はしっかりと勝たねば成らないので、緑の千円チップを20枚オーダーした。二万円の両替だ、どれだけ稼げばVIPルームへ招待されるか、見当は付かないが、やるだけやってみるしかない。

山村は赤の五百円チップ20枚に交換した。

「山村さん、岡部さんいらっしゃいませ、今日はブラックジャックでディーラーを務めさせていただきます。」あかねは、前にも増して丁寧に挨拶をし、カードを配りだした。

テーブルのルールはこうだ。

2 Decks・S17Stay・DOA・DAS・no Surrender・MaxBet10000

(二組のデッキを使う・ディーラーは17でスタンド・最初の二枚に対してダブルダウン可能・スプリット後のダブルダウン可能・サレンダー((勝負を降りる事))無し、一度に掛けられる最大金額は一万)

カードの説明にはスペード=S・ハート=H・クラブ=C・ダイヤ=Dまた数字の10のカードはTと表記する。

ゲームが始まった、最初は様子を見るため1000Betで行く。ともちゃんは500Betだ。

それぞれに二枚ずつカードが配られる、ともちゃんの記憶通り、橘あかねは手元のカードを確認した、ラッキーな展開だ、恐らく今後もカードを確認するはずだ、勝負が俄然有利になる。

ディーラーカードはオープンがC5、見えないはずのカードがSA合計6若しくは16だ。

岡部にはDQとDTが来た。幸先の良いスタートだ。

まず先制パンチをお見舞いしよう、二つに分けるスプリットを宣言する、それぞれに1000Betだ。

DQにD6、S3が入り合計19。DTにはC5、CA、D4で合計20。

ともちゃんは、S3とS7のカード合計10。

岡部がすかさず口を挟む「お、10やないかダブルダウンで勝負したらおもしろいなあ。」

ともちゃんは口をとがらせ「わ、分かってるよ、そうしょと思てたとかや。」と素直に従いダブルダウンを宣言、Betを上乗せし1000Betにする。

引いたカードはH4の合計14だ、ダブルダウンを宣言しているため、追加カードは引けず14で勝負だ、もの凄く引きが弱い。

他の二人の客もプレイが終わり、ディーラーがカードをめくる。

C5、CAである、合計が17以下なので、追加カードを引かねばならない、さらに、確率の高い10カードを引いても、16と合計が変わらないので、更に一枚引くことと成る、パーストには最適の手である。

そこでディーラーが引いたのはなんとC3、合計19である。

さすがに引きが強い、ディーラーが清算を行おうとしたその時、突然隣の席から待ったが掛かった。ともちゃんだ。

「あかねちゃん、ずるいわー、Aを11じゃなくて1にしてもう一枚引いてよ。」無茶苦茶な注文である。

たしかにAを1とすると合計が9となり追加カードは引けるのだが、常識では考えられない。

「山村さん、ダメですよ勝負なんですから、他のお客様もいらっしゃいますから。」

「そこをなんとか、今日の一発目のゲームやからお願い。」と食い下がる。

「分かりました、今回だけですよ。」これまで貢いできたのが良かったのか、あかねは従い追加カードを引いた。

あかねはD5を引き合計14、次はH9、合計23となりバーストした。

「もーバーストしちゃったじゃないですか、山村さん。」と頬を膨らました。

一ゲーム目の結果は、無理矢理ダブルダウンで掛け金を倍にした、ともちゃんがプラス千、岡部がスピリット両方勝ちプラス二千となった。

その後勝ち負けを繰り返し、10ゲーム終わった時点で、ともちゃんがプラス千七百、岡部がプラス一万八千。

「こんなことやってたら、VIPルーム行く前にお日さんが顔を出しよるな、次からMaxの一万ずつ掛けるわ。」

しかし、15ゲーム終了の時点では、岡部の負けが込み、プラス八千まで落ち込んでいた。

「ともちゃん、あかんわ相手の手が読めても引くカードが分からんから、思うように勝てん、無理かも分からんな。」岡部が珍しく弱気になる。

「おまっ、そんな事言わんと頼むわ、何遍も言うけどお前だけが頼りやねんから。」

「やるだけやってみるけどな。」

しかし、思うように運が巡ってこず、20ゲーム終了時点で、岡部プラス二万八千円、ともちゃんプラス五千七百円。

20ゲームこなした時に漸く運が巡ってた。

30ゲーム終了時点で、岡部プラス十四万八千円、ともちゃん一万八千七百円となった。

(ゲーム内容は、今後執筆予定の「別冊岡部社長カジノシリーズ全勝負の軌跡」をご覧ください。)

「このままじゃ埒が明かん。」と岡部が橘あかねに話しかけた。

「橘さん、他の客も引いたし、どやろマックスレート上げられへんか？一万やと刺激が少のうて、寝てまいそうやわ。」とあくびをした。

「それはどうでしょ、一応決まりなので、一度聞いてみますね。」とインカムに向かい誰かと話し出した。

しばらくし、黒服店長がテーブルに現れた。

「岡部さん、ずいぶん勝たれている様ですね、本当はお断りしているのですが、今日だけ特別にOKです、

マックス三万まで引き上げましょう。」と、特別感を表に出しながら笑顔で答えた。

「助かるわ、もう少しで寝てまう所やったわ、ほなら気合い入れ直して始めよか、橘さん。」
レートも上がり、調子に乗ったともちゃんは6ゲーム目でチップを使い果たし、リタイヤとなった。

「おいおい、ともちゃん調子に乗ったらあかんやん、もうお前、後ろで見とけ。」岡部にたしなめられ、ともちゃんは素直に従った。

「勝てると思ったんやけどなあ、何があかんかったんやろ。」とため息をつく。「全部や。」と岡部は素っ気ない。

その後は、ディーラー橘あかねと岡部のタイマン勝負となった、高レート勝負と言うことでテーブルの周りには、ドリンクを持ったギャラリーが増え出した。

7ゲーム目ディーラーのオープンカードにAが現れた。

「インシュランスいかが致しますか？」あかねは岡部にインシュランスを促す。
見えていないはずのカードが見える岡部は、ノーサンキューとインシュランスを断り勝負に出る。

山岡の手は、STのダブル。すかさずスプリットを宣言する。

最初のSTにD4、C7と引き、合計21。

次のSTにはCAを引き、合計21、両方の手が21だ、まず負けることはない。

両方に三万ずつBetしているので、六万の勝ちと成るはずだ。

ディーラーのあかねがカードを表にする。

HAとH3だ、この時点で合計14、余程のことがない限り勝ちは見えている。

あかねがカードを引いた、なんとS7、スペードの7だ、そこで合計21。

「ナイスディーラー。」思わず岡部が声を掛ける。周囲のギャラリーからも拍手が沸いた。
結果はオール21のドロウ引き分けである。

その頃、モニターで笑みを浮かべながら勝負を見ている男が居た。

そう、先ほどの巖ついやクザである。

「活きのええ奴がおるな、あいつ下に連れてけ。調子に乗らせてハメてまうんや。」葉巻を揉み消しながら、ほくそ笑んだ。

その後、数ゲームをこなし、山岡の勝ちが五十万を超えた頃、

「山岡様、実は先ほどからゲームを見られていた別のお客様が、どうしても山岡様と勝負がしたいと。」揉み手をしながら、黒服の中島がテーブルに近づいてきた。

「もし、山岡様さえよろしければ、場所を変え一勝負お願い出来ませんか。」

来た来た来た来た、ついにVIPルームへのご招待が来た。

山岡は歓喜を押し殺し、難しい顔で、「ん、場所を変えるってどこに連れて行くんや。」と白々しい。

「実は当カジノにはVIPのお客様専用のお部屋をご用意致しております、そちらの階段より一階下に下りて頂く形になります。」

見ると、入り口の横に下に降りる階段が見えた、階段には金の手すりが輝いており、その前にサングラスを掛けた、がたいの良い男が二人立ちふさがっている。

山岡は初めて聞くような顔で、「VIPルームが有るんか、興味有るな、ほなちょっと休憩してから連れてってくれるか。」

「かしこまりました、ご休憩がお済みになりましたら、いつでもお声をおかけ下さい。」と中島は姿を消した。

ソファーに身体を沈めながら、「ともちゃん、ようやく勝負や。」と髭を撫でた。

「山岡、頼むで今日の勝負で俺の人生が掛かってるんやからな。」と緊張している。

「下では、どんなシステムか分からんから、何とも言えんけど、何とかやる。」とグラスに口を付けた。

決戦の地へ

「ほな、ぼちぼち行こか、決戦の地へ。」岡部はゆっくりと腰を上げた。
ともちゃんは岡部を見上げる格好で「久しぶりや、あの階段降りるの。」と立ち上がる。

すかさず黒服の中島が近づいてきた。

「岡部様、山村様、ご案内させて頂いてよろしいでしょうか。」今日はなんか調子が狂う。
調子が狂う原因はこの黒服中島の口調がいつもと違うせいだと気がついた。

普段はもっと気軽に山村さん、と声を掛けるくせに、今日に限って山村様だ。

「どないしたん店长、いつもよりなんか様子がおかしいけど。」ともちゃんは中島に声を掛ける。

「そんな事ございません、山村様、普段通りにご案内申し上げますが。」

「なんでやねん、山村様なんか呼ばれたことないで。」

ちらちらと周りを気にしながら、中島が小声で囁いた。

「今日は特別な日なんですよ、家のボスが来ているんです。実は岡部さん呼んだのも家のボスで。」

話していた中島が急に押し黙った。そして知らぬ顔で。

「では、岡部様、山村様こちらへ。」と先に歩き出した。

階段前の厳つい二人組に合図をし、両脇へ退いた二人の間を階段へ案内する。

歩きながら、岡部が口を開いた。「店长、下はどんなゲームを置いてるんや。」

「そうですね、この階とほぼ同じ構成です、違うのは掛け金が大幅に高くなるくらいで。」

「具体的にどれ程高くなるねん。」

「この階は MinBet500 ですが、下は MinBet10000 からと成ります。さらに MaxBet は設けられていませんので、上限は有りません。」

なるほど、鴨に葱を背負わせるシステムって言う訳か。岡部は髭を撫でた。

「望むところや、いっちょやったるか。」気合い十分である。

厳重な監視と扉を幾度か越え、VIPルームへ到着した。

この階はエレベーターでは来ることが出来ず、一旦、八階のカジノルームを通らないと来られない構造になっているようだ、火事にでも成ればひとたまりもない。

その一方、警察などの介入があった場合は、最後まで逃れるチャンスが残っていると言うことでもある。

どこかに秘密の脱出ルートが有るのだろう。

VIPルームは、それぞれのゲームごとの部屋に分かれているらしく、通された部屋はブラックジャックのテーブルしか置かれていない。

部屋の隅にはバーカウンターが設えてあり、自由にオーダー出来るようだ。

ソファも上に比べると格段と良い物が据え付けられている。

「では、ひとまずそちらのソファでおくつろぎ下さい。」案内していた中島がお辞儀をし、部屋を出た。

「岡部、このクリームソーダな、上のと全然違うねん、なんて言うんかな、アイスクリームがな、こう上品やねん、分かる？ほんま上品やねん。」舌なめずりしながら説明している。

「そうかそうか、良かったな、その上品なアイスクリーム全部食べてまえ。」

バニーガールがやって来て、オーダーを聞いてくる。

「いらっしゃいませ、お飲み物はいかが致しますか？」

「クリームソーダの大盛り。」年甲斐もなく、ともちゃんは、はしゃいでいる。

岡部は何事もなかったかのように、「RD貰おか。」と一言。

かしこまりました、少々お待ち下さいと、バニーガールはカウンターへ戻って行った。

「おい、岡部、そのRDってなんやねん、うまいんか？」怪訝そうに聞いてきた。

「RD言うのは、フランスのシャンパンハウス、ボランジェのシャンパンや、普段はなかなか飲まれへん。」

ともちゃんは、軽蔑の目で「岡部、お前いつの間にそんなん覚えてん、いやらしい奴やなあ。」

そこへバニーガールが、ワゴンでクリームソーダとシャンパンを持ってきた。

ともちゃんは、アイスクリームの盛に不満そうだ、なにかブツブツ言っている。

「ええ温度や、さすがにVIPルームやな、出してる物が違うわ。」シャンパンを一口飲み岡部はご満悦だ。

ともちゃんは、しつこくブツブツと言いながら、溢れたソーダを床にぶちまけた。

もちろんバニーの白いしっぽを目で追いながら。

再び中島が現れ、ブラックジャックテーブルへと案内した。

「岡部様、プレイヤーが揃うまで、しばらくディーラーとブラックジャックをお楽しみ下さい。」と告げた。

第一の刺客と言う訳か、面白い、請けて立と。

岡部は髭を撫でながらテーブルへと向かった。ともちゃんはもちろん観戦である。

VIPルームのブラックジャックルールはこうだ。

4 Decks・S17Stay・DOA・DAS・no Surrender・MinBet10000

(四組のデッキを使う・ディーラーは17でスタンド・最初の二枚に対してダブルダウン可能・スプリット後のダブルダウン可能・サレンダー((勝負を降りる事))無し、一度に掛けられる最小Bet金額は一万)

ディーラーが現れた、初日に相手をした夏見だ、やはり腕が立つらしくVIPルームでもディーラーを任されているようだ。

「夏見です、先日はありがとうございました、本日もお手柔らかにお願い致します。」懇懇に挨拶をする。

「では、早速ですが、チップ交換はいかが致しますでしょうか？」

チップの説明を始めた。「こちらのテーブルでは、黒が五千円、紫が一万円、オレンジが十万円、茶色が五十万円となっております。」

岡部は考えながら、「紫三十枚とオレンジ二枚にしとこか。」と五十万円をテーブルに出した。

夏見は予想通り、ディーラーカードを一切見ない。

その為、相手の視覚を利用すると言う特殊能力が役に立たない、文字通りの真剣勝負だ、もっともオープンカードがAの時だけ見る事が出来るのだが。

数ゲームプレイし、岡部と夏見は一進一退、なかなか有利な展開に持ち込めない。

はなからディーラー有利なのは間違いがないのだ、運が巡ってくるのをひたすら待つしかない状況である。

5ゲーム目に潮目が変わった、埒が明かぬと掛金を五万にアップした時だ。

H A、S Qのブラックジャック、B Jは掛金の1.5倍が戻ってくるので、プラス七万五千。

この潮にのり、一気に押し切る。

しかし次の6ゲーム目、D 5、D 7からC 3、D 8を引き、バースト「マイナス五万」

7ゲーム目、H K、C Tが手元に来た、すかさずスピリッツを宣言する。

ディーラーのオープンカードはD Tだ、ディーラーの夏見は、オープンカードAの時以外は一切手元のカードを見ないので、特殊な能力も無意味だ、相手の手が分からぬままの勝負と成る。

万クローズカードがAの場合、B J成立で掛金はすべて没収だ、すなわちスピリッツ分も含めて十万の負けと成る。

夏見がカードを配る、最初のH KにC Qが入った、合計20。

次のC TにはH T、こちらも20。

後は夏見のクローズカードがAで無いことをひたすら願う。

ポーカーフェイスのまま、夏見がカードを開いた、D 8 オープンカードD Tとの合計18。

思わず冷や汗が出る、両方勝って、プラス十万だ。

その後もなかなか押し切れず、19ゲーム目となった。

H 6、S 5、合計11、ダブルダウンには最適だ、しかし夏見のオープンカードにD A。

夏見がクローズカードを確認する、一瞬カードの端を持ち上げるだけだ、あまりの短さにハッキリと読み取れない。

「赤のカードやったけどな、マークの密度からして10カードじゃない。」

当たりを付け、インシュランスを断り勝負に出る、ダブルダウンだ。

掛金を倍の十万出し、カードを待つ。

慎重に夏見がカードを開いた、S T 合計21。

次は夏見の番だ。

オープンカードD Aからカードを開く、H 5 16だ、H 6を引き12、S A、C 2と引き15。

たのむ、バーストしてくれ、思わず拳に力が入る。

夏見が最後のカードを引いた、S 3、合計18

ほっと息をつく、プラス十万。

ここまでの勝負でプラス325,000となった。

続く20ゲーム目、ゲームが動いた、初期ベット十万。

岡部にC Q、D K。夏見のオープンカードにまたもやD Aである。

運に任せ、インシュランスを断り、勝負を挑む。

スピリッツ&ダブルダウン、二つの手に分け、両方にダブルダウンを宣言した。
初期ベットを十万にしたので、両方の手に二十万ずつのベット、合計四十万の勝負だ。
夏見がカードを出す。

1枚目、手元のCQにDQが入る 合計20。

2枚目、DKにCAが入った、思わず小さくガッツポーズ 合計21である。

夏見が、顔をゆがめながら、クローズカードを開いた。

D6、オープンカードDAと合わせて合計17。

この勝負で四十万のプラスとなった。

その時「大変長らくお待たせ致しました、別室へご案内させていただきます。」と、店長の中島が現れた。

中島の後ろについて、廊下へ出る。

「Bj勝負は終わりみたいやな。」後ろで観戦していたともちゃんが岡部に声を掛けた。

「お前、居ったんか、帰ったんかと思てた。」つれない返事である。

「ずっと見てたよ、最初から最後まで、でなんぼ勝ったん？」せっかちに聞いてくる。

「お前が見てたんは、バニーちゃんのしっぽやろ、アホ。」

「まゝ、それも見とったけど、で、勝ちなんぼやねん。」しつこく聞いてきた。

「上の勝ちが523,000で、ここで725,000やから、合計で1,248,000や。」

「けっこう行ったな、ここからが本番や、気合い入れてやれよ。」ともちゃんは人事の様子である。

ホールデム 最後の決戦

一番奥の扉の前には、サングラスの男達が数人、警備のために待機している。

「えらい物々しいなあ、あそこに例のボスが居るんやろか。」ともちゃんが小声で話しかけてきた。

岡部は、ともちゃんを無視する、その部屋に連れて行かれるのが当然のように。

「おい、岡部、あの部屋に行くんやろか、なにが起こるんや。」思わず背広の裾をつかんでくる。

「黙ってついて行ったらええんや、成るように成る。成るようにしか成らんとも言うけどな。」

岡部は前を向いたまま呟いた。

程なく、その部屋の前に到着すると、サングラスの男達は当然のように、ボディチェックをし、ボスが待つであろう部屋のドアを開いた。

豪華なシャンデリアが部屋の中央につり下げてあり。

シャンデリアの下に、ポツンとホールデムのテーブルが一台置かれている。

ホールデムとはポーカーの一種で、テキサスが発祥のため、テキサス・ホールデムとも呼ばれる。

周りを見回すと、それぞれのソファーには二人の先客がくつろいでいた。

一人は小太りの、いかにも金回りの良さそうな男、頭には髪の毛の付いたヘルメットをかぶっている、隣にバニーガールをはべらせ、唾を飛ばしながら、大声でしゃべっている。

また、別のソファーには几帳面さを匂わせる銀縁眼鏡の痩せた男、恐らく同年代と思われる、四十そこそこであろう男が一人でシャンパンを飲んでいた。

島崎は「まもなくお客様がお揃いになりますので、今しばらくお待ち下さい。」と空いているソファーに案内した。

しばらくすると、ドアが開き一人の男が入ってきた、キャップを目深にかぶり

周囲を伺うように見ている。三十半ばと思われた。

「お客様が全員お揃いになりましたので、テーブルへご案内させていただきます。」島崎が全員を促す。

まだ、ボスは姿を現していない。このメンバーで勝負と言うことだろうか。

「お好きな席へお座り下さい、一度お座りになった席は以後変更出来ません、ご了承お願い致します。」

席を決めた時点から勝負は始まっていると言うことか、この席順が、ことのほか重要になってくる。

テーブルに近づくと、5席用意されていることに気がついた、全員が席に着いてから主役の登場と言うことだろう。

まず席に着いたのは、小太りの男だ、未だバニーガールを放す気はないようだ。

一つ挟んで左側に眼鏡の男。

キャップの男に目をやると、最後まで座る気がないようなので、眼鏡の左に座ることにした。

ようやくキャップの男が岡部の左に席を取り、全員が収まった。

席は、岡部を起点とし時計回りに、キャップ、小太り、空席、眼鏡という順である。

全員が席に着いたところで、黒服の島崎が再び現れた。

「すでにお分かりと思いますが、この勝負はホールデムで行います。」一呼吸置く。

「皆様には失礼かとも思いますが、今一度ルールのご説明をさせていただきます。」

基本的な役は、お馴染みのドロポーカーと同じですので割愛させていただきます。
と断りを入れ、島崎が説明を始めた。

「最初に皆様の中から一人ディーラーになって頂きます。ディーラーが決まれば、その左隣の方から順に、S B（スモールブラインド）、B B（ビッグブラインド）となります、この役は一ゲームごとに時計回りに変わって頂きます。」

(カードが何も配られていない状態でベットすることから、ブラインドと呼ばれる。)

「まず、S Bの方に一万チップをベットして頂きます、次ぎにB Bの方が倍のチップ、すなわち二万チップをベットして頂き、プレースタートとなります。」

ディーラーの役回りのプレイヤーが、まずS Bから時計回りにそれぞれが二枚と成るようにカードを一枚ずつ配ります。

皆様の手元に二枚のカードが揃った段階で、第一ラウンド「プリフロップ」です。

B Bの左の方からアクションを行って頂きます。

皆様にはアクションがいくつか用意されていますので、念のためご紹介させていただきます。

「フォールド」勝負から降りる時にコールして下さい。

「チェック」何もせず、次の方に順番を回す場合に使います。

「ベット」各ラウンドの最初にお金を掛ける場合はベットとなります。

「コール」前の方の掛け金に金額を合わせ、勝負を続行する場合です、前の方の掛けた金額に合わせてチップを出して頂きます。

「レイズ」すでに掛けられている金額に上乘せする場合、合計金額と合わせてコールして頂きます。

最後になりましたが、「オールイン」すべての持ち金を掛ける場合に使います、この場合最終ラウンドまでそのまま続行することが出来ます。

皆様がアクションを終了されれば、第一ラウンド「プリフロップ」の終了です。

次ぎに、ディーラーの方はテーブルの中央に三枚表向きにカードを並べて頂きます。。

この中央に出されたカードをプレイヤー共通のカードとして、お手持ちの二枚のカードと合わせて役を作って頂きます。

ここで第2ラウンド「フロップ」です、ディーラーの左の方からアクションを行って頂きます。

前回と同様、時計回りにアクションを行って頂き、それぞれのアクションが終われば次のラウンドへ移行します。

ディーラーの方は中央の三枚の所に四枚目のカードを表向きで出して頂きます、この四枚目を「ターン」ラウンドと言います、前回と同じ要領でアクションを行い、ラウンドを終了させます。

そして最後のラウンド、五枚目を「リバー」ラウンドと言います。

ここでもう一度アクションを行って頂き、終了です。

お分かりのように、一度の勝負は「プリフロップ」「フロップ」「ターン」「リバー」の4ラウンドで構成されており、すべてのラウンド終了時点でゲームに参加されている方の内、強い役、若しくは、強いカードを持っている方が、勝者です。

その際、集められたチップすべてが勝者の物と成ります。

お分かり頂けましたでしょうか？その他、ご不明な点がございましたらご遠慮なくお問い合わせ下さい。説明し終えた島崎がカウンターへ下がった。

しばらくすると、シルクのロングスカーフを首に掛け、首がちぎれそうな黄金のネックレスを輝かせた男がテーブルへ近づいてきた。キューバの葉巻を啜え、美女をはべらせながら。

そう、例のヤクザの親分、ボスである。

まるでゴッドファーザーのテーマが聞こえるようだ、テーブルの皆は呆気にとられている。

「みなさん、お揃いのような、ガァッハッハッハッハッ」と豪快に笑った。

「今日は、日頃お世話になっている、特別なお客様。すなわち、ここに座っておられる皆の事やが、を招いて、楽しんでもらおう、と集まって頂いた。」葉巻の煙をバフバフと吐き出しながら、しゃべり出した。

「突然声が掛かり、何のことだか分からないのですが。」と眼鏡の男が不服そうに言った。

「ん？えーと名前は、名前なんかはええか。」後ろに近づいた島崎を手で制し。

「皆さんは、当カジノが特別にご招待した、さっきも言うたが、特別なメンバーや。」

「ギャンブルに慣れており、なかなかの強者と聞いておる、今晚はワシを相手に日頃の腕を存分に発揮して貰いたい。」

その後、ボスは睨みをきかせ、有無も言わず全員を従わせた。

「まず、ワシからディーラーでええな。」

ボスの前にディーラーボタンが置かれた。

めがねの前にS B、キャップの前にB Bのマークが出される。

S B、B Bが場にチップを出し、ディーラーであるボスがカードを配る。

「プリフロップ」

めがねD 8、S A役無しS B

キャップD Q、H Q H QペアB B

岡部C 2、C 5役無し

小太りS 9、D T役無し

ボスSK、D4役無しディーラー

それぞれにカードが配られた。

この時点で一番強いのは、HQのペアを持っている「キャップ」だ。

カード表記には、強い方のスーツ(マーク)を頭に付ける。

(強 スペード=S ハート=H クラブ=C ダイヤ=D 弱)

そう、このゲームこそ岡部の特殊能力に最適なゲームなのである。

全員の手札、すなわち役が丸見えなのだ。

負けないゲームにだけベットし、勝てないゲームは参加する必要がない。

ただし、あまり露骨に行うと不審がられるので、ほどほどには負けるゲームにも参加する必要がある。

まず「プリフロップ」は全員が二万ずつ出し、コールすることで一回目の勝負が始まった。

現在のポットは10万だ。(ポット=場のチップを集める事、出されたチップの総額)

ディーラーがテーブル中央にカードを表向きに3枚並べる。

並べられたカードは、HT、CA、S3

「フロップ」ラウンド開始だ。

この時点でのそれぞれの役はこうだ。

めがねD8、SASAペアSB

キャップDQ、HQHQペアBB

岡部C2、C5役無し

小太りS9、DTHTPペア

ボスSK、D4役無しディーラー

まず、ディーラーの左隣、めがねからのアクションである。

めがね、チェックだ、場の様子を見るため、キャップへ回した、キャップ、チェック同じく様子を見た、岡部もチェック。

「おいおいおい、三人とも辛気くさいなあ、もっとドカンとベットせなあかんで。」ボスが声を荒げる。

小太り、ベット2万、初めてのベットだ、ボスはコールする、どかんとレイズして貰いたかった所だが。

めがね、フォールド、早々に勝負を捨てた。

キャップはコールだ、岡部はフォールド。

1度目は各プレイヤーの癖を見るため、勝負を降りた。

三名が勝負に残り、「フロップ」が終了した。ポットは6万、ポット総額16万

ディーラーが4枚目のカードをテーブルに出す。

D5 「ターン」ラウンドのスタートだ。

キャップDQ、HQHQペア

小太りS9、DTHTPペア

ボスSK、D4役無し

めがねが勝負を降りているので、キャップからのアクションだ。

キャップ、チェック、小太りにアクションを回す、小太り、ベット2万、ボスはコールだ、キャップもコールする。

三名とも勝負に残り、ポットは6万、ポット総額22万

5枚目のカードが出され「リバー」ラウンドが始まる。

カードはC8

キャップの役は最後までHQペアのみ、伸びなかった、小太りも同じく手が伸びず、HTペア。

ボスは結局役無しのままだ。

役だけを比べると、キャップの役が一番強いということになるのだが、この後、強引な駆け引きが待っていたのである。

まず、キャップがベット2万、すると、小太りが上乘せ、レイズ3万、ボスが更に上乘せ、レイズ10万、この10万のレイズに、たまたまキャップがフォールド、勝負を捨てた、小太りもフォールドした。

なんと、何も役の出来ていないボスが強引に勝利をかつさらった、いくら相手より強い手を持っていても、勝負から降りてしまえば負けなのである。

「ゲアハッハッハッハッ。」と大声で笑い声を上げ。

「なんや、大したことないな、強いのが集まってるんちゃうんか。」とポットのチップ37万を手元に寄せた。

「しけとるな、ま、最初やからこんなもんか、ゲアハッハッハッハッ。」

一度目の勝負の結果はこうである。

岡部マイナス 2万

小太りマイナス 9万

ボスプラス 21万

めがねマイナス 2万

キャップマイナス 8万

二度目の勝負、小太りは大量の汗をかきながらベットを重ねるが、ボスの強引なレイズにたまたま勝負から降りてしまう小心さを発揮している。二度目もボスのハッターリで勝負が付いた。

キャップは、三回目の勝負に、最後のショーダウン（手札を見せ合う事）まで勝負を挑んだが、ボスの役に負ける結果となった。

「ゲアハッハッハッハッ、ハッターリばかりやと思たか。」ボスは高笑いである。

3回目の勝負が終わった時点で

岡部マイナス 7万

小太りマイナス 51万

ボスプラス 94万

めがねマイナス 5万

キャップマイナス 31万

ボスの一人勝ち状態だ。

めがねは冷静さを保ち、早々に勝負から降りている、勝てる勝負しかしないタイプらしい、逆に言えば、勝負に来た時には、かなりの役が出来ているということだ。

四回目の勝負が始まった、ディーラーは岡部だ、順にカードを配る。

「プリフロップ」

岡部 D 8、D 3 ディーラー

小太り H T、S K S B

ボス C J、H 8 B B

めがね S 4、H K

キャップ S 7、S 5

早々にめがねがフォールドをコールして勝負を降りる、他は全員コールし、ポットは 8 万となった。

「フロップ」ラウンド、テーブルにカードを三枚並べる。

D 2、H 6、D K

岡部役無し

小太り S K ペア

ボス役無し

キャップ役無し

小太りからのアクションだ。

小太り、ベット 5 万、S K ペアで勝負する、ボスはコール、キャップはフォールド、勝負を降りた。

岡部コール様子見だ。

ポットは 1 5 万、ポット総額 2 3 万

「ターン」ラウンド C 7

岡部役無し

小太り S K ペア

ボス役無し

小太り、ベット 5 万、ボス、レイズ 1 0 万。

相変わらずハッターで勝負を仕掛けてくる、手が見えている岡部には通用しない手だ。

岡部、コール。

今のところ、岡部の手は役無しだが、自分の手に 2 枚、共通カードに 2 枚の合計 4 枚のダイヤが有る、全員の手元カードにダイヤが一枚も出ていないことを考えると、最後のリバーにダイヤが出る可能性は大いにあるのだ、ダイヤのカードが入ることを念じてコールで勝負を続ける。

小太り、コール勝負続行だ。ポット 3 0 万、ポット総額 5 3 万

「リバー」ラウンド D Q

念願通り、ついにダイヤのカードが来た、岡部の役がダイヤのフラッシュとなった。

小太りは K ペア、ボスは役無し、勝ちの確定だ。

今後どこまでポットを増やせるかが勝負である。

まず小太りがベット 1 0 万、ボスが 2 0 万にレイズする、岡部も負けずにレイズ 3 0 万だ、あまり急に上げるとフォールドされてしまう、慎重に吊り上げて行く。

小太りがコールで勝負に残る、しかしここでボスが一気に50万にレイズした、岡部の番だが、コールするところのまま勝負になってしまう、レイズ60万もう一度吊り上げる。
たまたま小太りがフォールド、勝負を降りた。

「一人脱落か、お前さんはどこまで付いてくれるかな。」と言いながら、さらにレイズで70万に吊り上げる、岡部も負けじと、もう一度レイズ80万。

ボスはコール出来ないのだ、役が出来ていないので、最後のショーダウン(手札を見せ合い、勝敗を決めること)まで行くと負けが確定してしまう。

ボスは大声で笑いながら、これでどうじゃ、とレイズ100万と一気に吊り上げた。

相手がコールしても同じ事なのである、であるから、一気に100万まで吊り上げたのだ。
まさか、100万まではついてこれず、フォールドするだろうと。

一方の岡部はといえば、相手の手が役無しである事は、とうの昔に判っている、落とすところが肝心だ、これ以上吊り上げるのは不自然であろう。

岡部はコールを宣言し、追加チップをテーブルに出した。

勝負を降りさえしなければ、勝つのは判っているのだが、やはり、もの凄い迫力だ。

相手の手が判っていなければ、思わずフォールドしていただろう。

「リバー」ラウンドだけでポットは230万、このゲームで総額283万のポットとなった。

「おっさん、なかなかやりよるな面白い、ギャンブルはこうでないと面白い。」ボスが口をゆがめた。

この後、2回ゲームを重ね、(めがねが奮闘し勝利を手にするのだが、その勝負は割愛する。)

6回目の勝負が終わった時点で

岡部プラス142万B Jプラス 124万8千 総額266万8千円

小太りマイナス202万

ボスプラス 93万

めがねプラス 81万

キャップマイナス106万

小太りが、バニーガールを脇へ呼んだ「おい、小切手もってこい。」

なんと、バニーガールは小太りの秘書だったのだ、秘書にまでバニーガールの衣装を着せるとは、なんとも酔狂なおっさんだ。

私設バニーに500万円と書いた小切手を持たせ、新たにチップと交換した。

また、キャップは店長に借用書を書かされている、用意されたチップから換算すると200万円借りたようだ。

そして、7回目の勝負が始まった。

「プリフロップ」

岡部H 8、D Q役無しB B
小太りH A、S 2役無し
ボスC 6、S 8役無し
めがねC K、S 3役無しディーラー
キャップH 3、S T役無しS B
全員コール、ポット10万

「フロップ」S Q、D T、H 2

岡部H 8、D Q S QペアB B
小太りH A、S 2 S 2ペア
ボスC 6、S 8役無し
めがねC K、S 3役無しディーラー
キャップH 3、S T S TペアS B

まず、キャップからのアクションだ、キャップはチェックで岡部に回す、岡部ベット10万、小太りコール、ボスコール、めがねもコールしポット50万 ポット総額60万

「ターン」S 9全員の役に变化無しだ。

岡部H 8、D Q S QペアB B
小太りH A、S 2 S 2ペア
ボスC 6、S 8役無し
めがねC K、S 3役無しディーラー
キャップH 3、S T S TペアS B

キャップはもう一度チェックで岡部に回す、岡部ベット10万、小太りコール、ボスコール、めがねはここでフォールドした、キャップ、コール。ポット40万 ポット総額100万

「リバー」S 6ここでも全員の役に变化無し。

岡部H 8、D Q S QペアB B
小太りH A、S 2 S 2ペア
ボスC 6、S 8役無し
キャップH 3、S T S TペアS B

キャップはS Tのペアで勝負に出る、ベット10万、勝ちが確定した岡部は、すかさずレイズ20万、小太りがフォールドし勝負を降りる、ボスはここでも強気に来た、レイズ50万、キャップはここでフォールドだ、潮時と感じた岡部はコールする。

ポット110万 ポット総額210万

ショーダウンでボス S 6ペア 岡部 S Qペアで岡部が勝ちとなった。

ともちゃんが後ろのソファ席で、パチパチと手をたたいている。

その時、先ほどのB Jディーラーの夏見がボスの耳元に何事か囁いた、小さく頷いたボスはこちらを見てニヤリと笑った。

この時点で

岡部プラス280万 B J プラス 124万8千 総額404万8千円

小太りマイナス224万

ボスプラス 21万

めがねプラス 69万

キャップマイナス138万

8回目

「プリフロップ」

岡部SK、CQ役無しSB

小太りS5、S9役無しBB

ボスS3、D6役無し

めがねC8、H8H8ペア

キャップC7、C9役無しディーラー

全員コール、ポット10万

「フロップ」DT、HA、CJ

岡部SK、CQストレートSB

小太りS5、S9役無しBB

ボスS3、SASAペア

めがねC8、H8H8ペア

キャップC7、C9役無しディーラー

岡部にストレートの役が出来た、ここは一気に突き放したい、最初からベット10万だ、役が出来ていない小太りが、フォールドで勝負から降りた、致し方なし。

続くボスは、岡部の頭越しにチラチラと後ろを見た後、フォールド、勝負を辞めてしまった。

今までにないパターンだ、すべての勝負に乗ってきたボスが、SAペアの役が出来ているにも関わらず、早々に勝負から降りるのは不自然だ、ぞくりと全身を寒気が襲った。

めがね、キャップとコールし、ポットは30万 ポット合計40万となった。

「ターン」ラウンド、「リバー」ラウンドと進んだところで、めがねにS8のスリーカードが出来た。

「リバー」ラウンド、めがねとの一騎打ちでポットを稼ぎ、この勝負138万の岡部の勝ちで終わった。

その後数ゲーム進むも、岡部が有利なゲームにはボスは一切乗ってこない、何かしら、外部から合図が出ているはずだ。

ボスがフォールドする直前、いつも岡部の頭越しに後ろを確認している。

ボスの目を通して岡部も同じ情景を見ているのだが、合図が何か一向に判らない。

バニーガールがワゴンを押しているだけだ。

何らかの合図が有ると言うことは、岡部の手が相手に見られている、相手の手が見られるのは岡部だけの特権では無くなったのだ。

何か、作戦を考えないと、ボスを勝負に引きずり出せない、ボス以外のプレイヤーから特殊能力で勝ちを収

めるのは不本意だ、どうにかして勝負をさせる手は無いものだろうか。

すでに、岡部の中では、700万円を取り返せばいいだけの勝負では無くなっていた。

その後のゲームも、後ろを通るバニーをチラチラと見ながら、ボスは一向に勝負に乗ってこない。

しかし、その間に、バニーからの合図が判明した。

合図は「うさぎのみみ」を使って行っていたのだ。

岡部にボスよりも強い手が入った時には、片耳をたらし、ボスが有利な時には、両耳が立っている。

みみがたれている時は必ず勝負から降りるのだ。

もっとも、合図の方法が判明したところで、情勢は何も変わらないのだが。

そこで、岡部はある勝負に出ることにした。

ボスが大金を掛け、勝負をするであろう役が、ボスの手に入った時がその勝負だ。

我慢強く、その時が来るまで待った。

そして、ついに勝負の時がやってきた。

岡部は一切自分のカードを見ない事で、相手に知られるのを防ぐ作戦をとった。

自分の手元に役が出来ているかどうかは相手にはもちろんだが、自分でも判らない、危険なギャンブルだ。

自分の手元に勝てる役が出来ていることを、ただひたすら願い、最後のショーダウンまでベットし続ける。

この方法しか、ボスから金を巻き上げ、勝利を手にする事は出来ない一か八かの勝負だ。

そしてその勝負が始まった。

勝負の前に現在の持ち金を整理しよう。

岡部、BJからの勝ちも含めて374万円。

小太り、小切手500万円を切り手元に396万円。

めがね、上手くすり抜け、111万円。

キャップ、200万円の借用書を書き手元に252万円。

「プリフロップ」全員にカードが配られた。

岡部 一切カードを見ない。

小太りCK、DJ役無し

ボスHA、CAHAのペア

めがねS5、S4役無し

キャップHJ、HK役無し

プリフロップは順調に全員がコールで始まった、ポット10万

「フロップ」SA、SK、SJ テーブル中央に3枚のカードが並べられた。

岡部役不明

小太りSK、SJのツーペア

ボスSAのスリーカード

めがねSのフラッシュ

キャップSK、SJのツーペア

現時点では「めがね」のフラッシュが一番高い役だ。

まず最初に、小太りがベット10万、すかさずボスがレイズ30万と吊り上げる、スリーカードが出来ていれば当然だ。

めがね、キャップがコールで勝負続行だ、当然岡部もコールする。

ポット150万円 ポット総額160万円

「ターン」S J 4枚目のカードが出された。

岡部役不明テーブルのカードでS Jのワンペア

小太りの手に、J 3枚、K 2枚のフルハウスが出来た。

ボスには、A 3枚、J 2枚のフルハウス。

めがねは変わらず、Sフラッシュ。

キャップにも、J 3枚、K 2枚のフルハウスだ。

フルハウスが3名、フラッシュ1名、この時点で岡部の勝ちは、絶望的だ。

少なくともフルハウス以上の役を作らなければ勝てない。

手元のカードは不明だが、恐らく見たところで大きく変わることは無いだろう。

岡部はソファー席のともちゃんに目配せをし、自嘲し両手を頭の後ろで組んだ。

お手上げと言うことであろう、ともちゃんは心配そうに岡部を見ていた。

小太りがアクションを起こす、ベット50万、ボスがレイズ70万。

「お前ら、やめといた方がええんとちゃうか、ガァッハッハッ。」と大笑いだ。

めがねは苦笑いし、コール70万で付いていく、フラッシュが出来ているのだ普通は負けない。

キャップが果敢にもレイズ90万、20万の上乗せた。

「なかなかやりよるな、おもしろい、ガァッハッハッ。」ボスのご満悦だ。

岡部はすでに後には引けない、コールで勝負を続ける。

小太りコール、フルハウスが出来ているのに慎重だ。

ボスがレイズ100万をコールした。

「おい、島崎、借用書ようけ用意しとけよ、ガァッハッハッ。」ボスは島崎に向かい大声で叫んだ。

めがねは大量に汗をかきながら、「オールイン」を宣言し、手元のチップ全額をテーブルに出した。

「オールイン」は手持ちの全額をベットすることで、ショーダウンまで勝負に参加出来る。

勝ちを確信して初めて成立するアクションである。

岡部はコールし、勝負にしがみつくと、もうやけくそだ。

そこで小太りが一気に勝負に出た、レイズ200万。ボスもレイズする250万。キャップは、目深にかぶったキャップを一度引き上げ、場を見回してから、「オールイン」を宣言した。

その後、岡部、小太りがコールし「ターン」ラウンドが終了した。

この「ターン」ラウンドの内訳だ。

岡部250万円(残金92万円)、小太り250万円、めがね「オールイン」で79万円、キャップ「オールイン」で220万円、ボス250万円

ポット1,049万円 ポット総額1,209万円となった。

最後のラウンド「リバー」場に出たカードは D A

岡部役不明テーブルのカードでS A、S Jのツーペア

小太りの手は変わらず、フルハウス。

ボスには、A 4枚 Aのフォーカードとなった、ボスは笑いが止まらない。

めがねは変わらず、Sフラッシュ。

キャップも変わらず、J 3枚、K 2枚のフルハウス。

Aのフォーカード、現実的にはポーカー最強の手だ、この手に勝つのは、小説の中でも無茶な話であろう。

唯一勝てる手は、ストレートとフラッシュの合成役「ストレートフラッシュ」だけだ。

アクションが始まる、いきなり小太りがベット100万、更にボスがレイズ200万。

めがね、キャップは「オールイン」を宣言しているので、見ているだけだ。

ここで岡部も「オールイン」を宣言した、折角これまで積み上げた勝ちがペアである。

この勝負で勝てる可能性は限りなくゼロ、ともちゃんが両手を挙げ首を振っている。

「アイスクリームの大盛り追加。」ともちゃんはヤケ食い体勢に入ったようだ。

ここで、小太りが秘書のバニーを呼び、追加小切手500万円を切った。

レイズ300万、ボスは小太りを見ながら「折角500の小切手切ったんやから、使わしたろ。」とレイズ500万をコールした。

小太りはボスを憎らしい目で睨みながらコールした。

こうして最終ラウンド「リバー」のアクションが終了した。

岡部「オールイン」で92万円、小太り500万円、めがね、キャップは「オールイン」している為0円、ボス500万円

ポット1,092万円 ポット総額2,301万円となった。

今回の勝負で、初めて全員がショーダウンまで残り、それぞれの役で勝負をする。

本来、ショーダウンの順番は最後にベットあるいはレイズしたプレイヤーから始めるのだが、ボスは自分の勝ちを確信し、他のプレイヤーに開示を求めた。

「この勝負なかなか面白かった、そやけど途中でオールインして、金を出してない奴がおるやろ、まず最初にオールインしためがね、手札なんやねん。」

呼びかけられためがねは、めがねを拭く手を止め、じっとボスを見た。

「私から開示でよろしいですか、では。」と、自信ありげに手札をめくった。

スペードのフラッシュである。

「お、フラッシュかなかなかの手やけど、ようそれで勝負したな、ガァッハッハッ。」

その反応を見ためがねの顔色がみるみる変わっていき、汗が流れ落ちた。

「おい、借用書持って行け、次の勝負のチップがあらへん。」と島崎を呼んだ。

「他の二人にも用意しとけよ、ガァッハッハッ。」まるで品がない。

「次はその帽子、手札見せてみ。」帽子と呼ばれたキャップは表情が読み取れない。

黙ったまま、手札を開いた、スペードのJをトップとするフルハウスだ。

「おおお、フルハウスかその手では勝負捨てられんわな、そやけど残念やったな。」

自分の手もオープンにせず、ボスはみんなに負けを宣言していく。

「つぎ、おっさん見せてみ。」岡部は自分に声を掛けられたと思い、ボスを見るが、ボスは小太りに話しかけている、すでに忘れられた存在だ。

おそらく、バニーガールがつねにミミを立てていたため、どうでも良い存在なのだろう。

声を掛けられた小太りが落胆しカードをめくる、そう、手元にある役はキャップと同じフルハウスなのだ、先ほどのキャップへの反応で、負けたと思い至ったのである。

「おっさんもフルハウスか、どないなっとなねんこの勝負。」

「ほなら、僕のカードみせよか。」と自分のカードを一枚ずつめくる。

「最初のカードはこれや、クラブのA、で2枚目がこれ、ハートのAや、どや、Aのフォーや、ガアッハッハッ。」

とポットに手を伸ばす。

「今回の勝負で2,300万か、やめられんな、ガアッハッハッ。」

そのとき、小太りが声を出した「一人、まだオープンしてないようやが。」

「ん、そやそや、忘れとったわ、これだけの手を見せられて、もうええやろ。」

と、岡部に目を向ける、正直、岡部もめくる気は無い、どうせ勝てないのだ。

「一応、念のために表向けといて。」とボスにうながされ、岡部は投げやりにカードを開いた。

カードも見ずにポットのコインを手元に寄せていたボスが、目を丸くしている小太りと目が合った。

「どないしたんや、そない目剥いて。」小太りに問いかける。

「ス、ススス」

「スーシュー、てなんやねん、おまえに告白される筋はないわ、気持ち悪い。」

横からめがねが「ストレート・フラッシュですね。」と岡部を見た。

言われた岡部が改めてカードを確認し目を剥いた。

手持ちのカードは スペードの10とスペードのQであった。

共有カードのSA、SK、SJと合わせ、なんとスペードのストレートフラッシュが出来ていたのだ、それも紛う事なき最強の手「スペードのロイヤル・ストレート・フラッシュ」の完成である。

この瞬間、ボスの手から勝利が滑り落ち、岡部の勝ちと成った。

2000万円以上の勝ちである。

ともちゃんは大盛りのアイスを手を持ち放心している。

ボスも放心している。岡部はもっと放心していた。

「おっさん、やりよるな、おもしろい、今日はその金、全部使こて帰ってもらおうで。ガアッハッハッ。」ボスが顔をゆがめながら笑った。

その時である、店長の島崎がボスに駆け寄った、尋常ではない様子だ。

「なんやと。」慌てて、ボスが椅子をける。

「おい、警察や、荷物だけ持って逃げるんや。」

幸い、岡部は財布しか持ってきていない、そのまま席を立つ。

「ともちゃん、逃げるぞ、はよ来い。」岡部が山村に声を掛ける。

ともちゃんは食べかけのアイスクリームを恨めしそうに睨み、名残惜しそうに席を立った。

めがねは今までの冷静さとは裏腹に、目の前のチップをかき集めている。

「チップはあきらめて下さい、捕まったら人生の終わりですよ。」島崎がたしなめる。

「どこから逃げるねん。」ともちゃんは、岡部の後に付きながら聞いてきた。

「そんなん知るか、あのボスに付いていったら間違い無いやろ。」岡部はそう答えた。

店長の島崎が、皆を誘導している。

「このまま、奥に進んで下さい、地下に降りる階段があります。」

「そう言うことや、階段があるんやて、出た所で警察に鉢合わせせえへん事を祈るだけや。」

島崎は、全員が階段に向かったことを確認し、後に続いた。

一番奥の部屋は、モニタールームだった、壁一面にモニタが何十個と備え付けられている。

上のカジノルームを映しだしているモニタには、沢山の私服刑事とそれに対抗する、サングラスの男達。この階に続く階段を今にも降りようとしている刑事達を、あのいかついサングラスの男達が押し返している。

モニタールームに踏み込んだ岡部が周りを見回した、しかし、この部屋に階段らしき物や、この部屋に入ってきた扉以外に、外に通じる扉はない。

後ろから入ってきた島崎が、人々を掻き分けながら前に出た。

「岡部さん、ちょっとそこ良いですか。」と場所を変える、

島崎がその壁に爪をかけ横に引こうとしているが上手くいかない。

モニタの刑事達は、一步一步、歩を進め、このままでは間もなく突破してくるだろう。

「店长、どないしたんや、変わるか。」岡部が声を掛ける。

島崎は、手に汗をかき、うまく引っかからない様である。

「すみません、岡部さん、この壁をスライドさせると、階段に出られるんです、今まで一度も使ってないので、動きが悪いようで。」と再び岡部に場所を譲った。

岡部は警備会社を営んでいるだけ有り、力には自信がある。

壁に手を掛け「ふん。」と気合いを入れ、力一杯横に押す。

メリメリと言う音とともに、少しの隙間が出来た、そこに指を差し入れ、一気にスライドさせる。バリバリバリ、と何かがめくれる音がして、その壁は開いた。

「店长、この壁、後からペンキ塗ったやろ、隙間にペンキが染み込んで引っ付いてたで。」

吹き出した汗を腕で拭いながら岡部が文句を言った。

「急いで下さい、このまま一番下まで、最後は通路になっていますので、行き止まりまで進んで下さい、私は、最後にこの壁を閉めて追いかけます。」

壁が開いたと同時に、階段での揉み合いから逃れた刑事達が、この七階へと続く階段を駆け下りた。

エピローグ

薄暗い階段を下りながら、ともちゃんが聞いてきた。

「岡部、今日のあのチップはどないなんねん。」

岡部は、振り向きもせず「どないもならんよ、そやから言うたやろ、成るようにしか成らんって。」

「どういう事やねん、岡部。」ともちゃんは食い下がってくる。

「どうもこうもないやろ、無かったことになるだけや。」

ともちゃんは絶句している。

「無かったことになって。今から、取りに帰る、もったいないやん。」

「あほか、捕まったらお前の人生終わりやぞ、店長も言うとったやろ。」

「そんなん言うても、あんだけ勝ったのに。」今にも引き返しそうになる。

放っておこうかとも思ったのだが、こいつが捕まれば間違い無く口を割る、岡部自身も警察のお世話になる事は間違い無い、無理矢理、手を引っ張り前を進ませる。

かなり階段を下った、感覚ではすでに10階分以上は降りている、その時階段が終わり、通路になった。腰をかがめないと進めない、手で辺りを探りながら、しばらく進むと行き止まりとなった。

「なんや、行き止まりやん、どないすんねんこの後。」ともちゃんが文句を言う。

後ろから追いついてきた店長島崎が前に出た。

「皆さん、ここまで来ればひとまず安心です、足下のマンホールから雨水管に出ることが出来ます、この度は大変ご迷惑をお掛けしました、お気を付けてお帰り下さい。」島崎はこの場に留まるようだ。

岡部は何故か島崎に握手を求めた「出てきたら連絡してくれ。」

ともちゃんはキョトンとして「なんでや、ここまで来たら逃げられるやん。」

「まあええから、先を急ご、いつ警察がここまで来るかわからへん。」

しばらく雨水管を歩き、マンホールを開け外に這い出した、微妙な場所である、生田警察の隣に出たのだ、生田神社の境内だ、都合良く本殿の影に隠れていたから良かった物の、見える場所なら間違い無く職務質問対象だ。

とっくに朝が明けており、通勤するサラリーマンが不審な目で見てくる。

本殿に二礼二拍手一礼をし事務所へ向かった。

事務所に帰ると、コーヒーカップを持った大輔が出迎えた。

「どうしたんですか、その格好、泥だらけじゃないですか、なんか有ったんですか？」と、慌ててタオルを取りに向かった。

岡部はネクタイを取り、背広をハンガーに掛ける。

「あーあ、あんなに勝ったのに一銭も手に入らへんなんか、有りか？」ともちゃんは、ふて腐れながら言った。

「しゃあないやんか、警察のヤサが有ったんやから。無事にここまで帰れただけでラッキーや。」

「そやけどな、折角、借金から逃れられると思ったのになあ。」あー、これからどないしょ、と溜め息を付いている。

「たぶん大丈夫ちゃうか、お前の所に催促に来たら、俺に金払わなあかんねやし、来えへんやろ。」

大輔からタオルを受け取り、顔を拭きながら言った。

大輔が社長の正面に座り、「で、首尾はどうだったんですか？」と聞くと。

「お前、正面に座るな、自分自身と目があって気色悪いねん。」社長に怒られた。

「そやけど、最後の勝負すごかったなあ、大輔にも見せたかったわ、なあ岡部。」

大輔は、おもわず腰を浮かせて「どんな勝負だったんですか？」と先をうながす。

「最後はな、皆、目が血走って、修羅場や。世界で一番熱い勝負やったんちゃうか、何せ、一勝負数千万円動いたからなあ。」と、山村は大輔に唾を飛ばした。